

デジタルバカ一代



ル活用支援員向けの講座を実施したなかで、気づきがあったので書いていきたい。

6回目の記事で書いた通り、デジタル活用支援員とは「高齢者が物理・精神的に身近なひとに、デジタル活用について相談ができる」ことを目指した国の政策であるが、常々デジタルに関する専門性以外に、高齢者と接する知識や心構えが、支援員にとって重要である、と現場で感じることも多かった。現在デジタル活用支援員は6人前後で活動をしているが、偶然福祉の専門性を持つ支援員の方がいたので「高齢者への接し方(接遇)講座」を開催することになった。

私も講座を受講したが、特



デジタル活用支援員の研修。高齢者向けの接遇をオンラインで学ぶ

に気づきとして大きかったことを書く。それは「高齢者側に立って考える」ということである。書いてみると当たり前のことであるが、相手の立場になって考える、という明確な姿勢がないとこれがなかなか難しい。

例えば高齢者にとって「デ

有の事情があるとするれば、その考えを捨て、より相手に寄り添った適切な対応ができると思う。

そして、高齢者側に立って考えること、すなわち相手の立場になって考えることができれば、高齢者に限らず、青年、子ども、障がい者…等あらゆる対象者に対して適切に対応ができることも大きな気づきであった。

この気づきを得たことであらためて確信したことがある。それは「高齢者が高齢者にデジタルを教える」ことがデジタル活用支援員の最高の形のひとつ、ということである。高齢者側に立って考えられるのは、当然高齢者が一番であるし、なにより「私もやってみよう」と考える高齢者も増えるだろう。

一方で、高齢者だ

るが、前述のように高齢者特

けでくくるのではな



執筆者
トナリノ代表理事
佐々木信秋

【一般社団法人トナリノ】
SAVE TAKATA (セーブタカタ)が前身組織。「地域の相棒」を合言葉に、広報物制作、商品開発販売、事務局広報代行などのサービスを、分野や地域を超えて提供。ICT支援員3人が所属、デジタル人材の育成にも注力している。事務所は高田大隅のたまご村内のコワーキングスペース「ヤドカリ」。電話番号は47・3287。

く、子どもが高齢者にデジタルを教える、高齢者が子どもにデジタルを教える、といった多世代交流も含めた考え方は、少子高齢化が進む地域社会のなかでは重要な考え方である。今後も私たちがらしいデジタル活用支援員の形を模索していきたい。

⑩ デジタル活用支援員の現場から(1)

最近「デジタルバカ一代を見ていますよ」と、地域からお声をかけてもらうことが増えた。本連載の動機が「デジタルに関する情報発信を地域に届けたい」であったため、うれしく感じると同時に、あらためて紙面提供をいただいている東海新報社に御礼申し上げます。さて、本連載も10回目となったが、先日デジタ